

右の見地よりせる批難の具體化として、五月十三日發行労働運動第十一號第二頁「足尾争議解決の真相」の末尾に曰く「我々は事實の犠牲者三百五十人の誠首を記憶せねばならぬ。然り野心家が其舞臺たる組合の擴張のために犠牲とされたる人達を

而も彼等は、僕等を組合運動の敵の如く言つて居る。僕等が組合をどう見るか、それは改めて云ふこととして、ここに最後の一言を書きつける。

足尾の坑夫自身、及び全労働者階級の誇りであつた足尾争議の猛烈な意氣は、指導者の爲に失はしめられた。搾取と強壓とに對する反動意志の上に、革命的精神を點火する筈の労働運動は、却つてその意志を奪ひ、その爆發的精神を抑止して羊の如く猫の如くならしめた。

僕等は、僕等の刺戟たる勇敢卒直な友を失つた。そして足尾の罷業は解決した。

右其所論の大體を窺ふべし。而して足尾問題を措いても帝大出身者を指導者とする友愛會に知識階級に對する憎惡と所謂指導者心理に對するの攻撃が集中することは又さもあるべき感情ならずとせず。

兎まれ彼等は云ふ「全日本鑛夫總聯合會の爲に會員二千の足尾聯合會の存在は必要なるべし、されど労働者のあるところ組合の種は盡きず。現存の組合を大切にするために、不純の妥協をなすことは責むべし。足尾の労働者が其本然に従つて、破壊を辭せずとなしたるとき、何故指導者は是を抑壓し

たるか。何故労働者の革命への進行を壓止したるか。労働組合最後の目的は革命にあらずや。資本主義の倒壊にあらずや。労働者の革命的進行が官憲に粉碎さるゝとも、粉碎に對する昂憤と憎惡と反抗とは、更に再び打衝かる機會を捉へ打衝かる力を強くせんのみ、かくして最後の日は徐ろに近づくべきに、麻生氏が足尾に於て總てを捨て、妥協したるは、全日本鑛夫總聯合會のために足尾二千の會員を失ふを欲せざりしと云ふ以外に何の理由がある？」と。赤裸々に云はゞ此所説に對し、同感を表するは明治會館の夜の聽衆のみならず、在京労働組合幹部及會員にも尠少ならざるものあるべし。

是に對し麻生氏等全日本鑛夫總聯合會の所説は「労働組合は労働者の實際生活を擴張しつゝ徐々に理想に近づかんとするもの、素より資本主義の大改造を期待して止まざる事に於て、何人にも劣らざれど、労働者を革命的闘争のための道具にせんことを欲せず。強大なる團結を新社會の經緯たらしめんことを理想とすべし、社會主義者の攻撃と批難とは、持たざるもの(組合を)の悲哀を告白するものなり。彼等は何等責任を感せず、たゞ革命を云爲する自己の言葉に酔へるものなり。たとへば目前に家族をかゝへて明日は何處へ立退くべきかを思ひ悩める労働者を驅つて慘憺たる大破壊へ赴かしむることは、彼等の家族の爲を思ふも何人か、かゝる無情を敢てすべき」と。